

第2回きのくにコミュニティスクール推進協議会 協議概要

- 1 日 時 令和5年6月8日(木) 14時から16時まで
- 2 会 場 和歌山県立近代美術館 2階 ホール
- 3 テー マ 学校・家庭・地域が総がかりで子供の生きる力を育む
～全ての人当事者となり、協働するために～

- 4 報告事項
「当事者意識をもち、ふるさとの未来を託せる子供を育てるため、それぞれの立場でどのようなことができるか、あるいはできそうか。」

- 5 協議事項
(1) それぞれの立場から求める校長像と、そのために必要な行政の支援について
(2) 学校運営協議会の活性化について

6 委員による主な意見

○報告事項

【公民館の立場から】

- ・子供や学校のために、何か役に立ちたいと思っている地域の方は多くいる。ただ、どうつないでいけばいいか、どう学校に入っていけばいいかが分からないのが現状である。ここで学校と地域をつなぐことが公民館の果たす役割だと思う。

【家庭教育支援の立場から】

- ・子供たちを皆で育てようという意識をもつため、困った時に身近にいて、あえて「つながる」って言葉を出さずに「ちょっと知り合いましょう」など、ステップアップしていけるきっかけをつくる活動をしていけたらと考えている。
- ・子供たちが、地域のおばちゃん関わった素敵な時間があれば、記憶に残り「あ、これはおばちゃんがやってくれたんやな」と思い出す。いつか子供たちと出会った時に、コミュニケーションが取れるきっかけにもなるなど、つながりを大事にするということも感じてもらえる。



【学校運営協議会の立場から】

- ・学校の取組はもちろん、例えば地域である夏キャンプの行事に、小・中学生以外に夏休みに帰省している高校生、大学生にも運営側として提供する側になってもらうなど、人が循環できる仕組みが必要である。頑張っている若者、お兄ちゃんお姉ちゃんの姿を見てもらうのが1つの目標である。

【学校の立場から】

- ・子供たちや教職員の実態として、地域の歴史や文化について、ふるさとのを知るところが弱いと捉えている。ふるさと教育でふるさとのを知る活動を取り入れた活動を計画している。
- ・学校がどう子供たちを育てていきたいかというスクールポリシーを明確にし、地域あるいは教職員に提示することが大事だと思っている。その上で、いろんな取組にそれぞれが自分事として取り組むということを前提にやっていくことが必要だと思っている。

【行政の立場から】

- ・学校側が目指すことを実現しやすいように、教育委員会がどう考えるかが全てではないかと思っている。
- ・学校で計画したものに基づいて、子供たちが実践したことや課題意識をもったことを未来プロジェクトという形で、市長や教育長に提案し、実際に行政に反映させる取組をしている。

【学識経験者の立場から】

- ・講演の中で「年に1回は学校の何かにチャレンジしてください。」とお願いしている。全ての保護者や、地域の方々に「年に1回学校に来てください」ということは、逆に言うと、年に1回は学校に来れる場を学校や学校運営協議会が用意しなくてはならない。学校を核として、つながりができる取組を自動的に作り出していくことが必要である。

○協議事項

(1) それぞれの立場から求める校長像と、そのために必要な行政の支援について

【学校が求める校長像】

- ・教育目標に向け進めていくため、何が課題かを明確にし、いかに解決していくかについて、自分だけではなく、教職員それぞれが当事者意識をもち取り組める仕組みを作っていくこと。
- ・目標のために、今これをしているということを、きちっと教職員に対して説明し、説得する力も校長には必要。また、ブレないことも大切
- ・教員組織を動かすこと。校長として地域の方々との関係づくり。地域行政との連携

【必要な行政の支援】

- ・専門性の高いアドバイザー等へのつなぎと、教育目標達成のための費用面
- ・コーディネーターの配置の予算化

【地域側が求める校長像】

- ・話がしやすいことや、近しく接してくれる校長先生
- ・学校と地域の壁を取ろうと意識している校長先生
- ・教職員を巻き込んでいく校長先生
- ・学校運営協議会に積極的に取り組み、教職員にも取組を広げ、包み隠さず話ができる関係性を作っていける校長先生

【必要な行政の支援】

- ・本音で情報交換できる場の設定
- ・地域と学校の活動があった際の事後の経過報告
- ・校長先生が変わっても地域として学校運営協議会や、コミュニティ・スクールに取り組んでいく仕組みを作ること

【行政側が求める校長像】

- ・「こんな子供を目指そうよ」「地域はこんな地域であってほしい」そのために私たち大人はそれぞれの立場から何ができるのかをしっかりと話をするところからスタートすること。

【必要な行政の支援】

- ・学校運営協議会等に、担当の社会教育主事、指導主事が行き、その中でファシリテーターをすることにも取り組んでいる。何度か関わらせてもらうことで、熟議の仕方や、雰囲気が変わってきたという報告も受けている。



【学識経験者の立場から】

- ・分散型のリーダーシップが大切になるので、学校運営協議会という取組も大事になる。リーダーシップを校内で委ねる。校内だけではなく地域の方々や保護者、さらに、高校レベルでは生徒に委ねていくことも必要である。校長のリーダーシップを強いリーダーシップと捉えるのではなく、フォローできる方々に、委ねていくスタイルが求められてきている。
- ・行政は戦略的に得意不得意をうまく補いあいながら教職員の配置を考えていただくということ。校長先生の不得意は、副校長か教頭を充ててそれを補う。

(2) 学校運営協議会の活性化について

【内川委員からの提案】

『教育目標にコミットする 南高版きのくにコミュニティスクール』

学校運営協議会を運営していく中で3点の課題を感じていた。

○学校側として学校運営協議会が、報告会だけの感じになっているのではないか。

○委員さん側からすると意見を言うだけの会になっているのではないか。

○教職員からすると学校運営委員と管理職だけの会になっているのではないか。

そこで、学校運営協議会委員の構成メンバーの変更に取り組んだが、委員を変更しただけでは活性化につながらない、体制や運営方法について見直す必要があると気づいた。教育目標を達成するために、学校運営協議会に積極的に参画してもらいやすい方法を考えた。

1点目はコーディネーターの配置である。コーディネーターは学校の運営に理解のある方で、かつ地域のことをよく知っている方を選出しようと考えた。

2点目は部会の設置である。評価部会、域学連携部会、プロモーション部会の3つの部会を設置した。

※評価部会は、実施した取組が次のステップにつながる学校評価の方法を分析することを目的としている。

※域学連携部会は、地域の活性及び地域の人材育成を目的とした、地域と連携した取組に対する提案と協力支援を目的としている。

※プロモーション部会は、南部高校の魅力発信の取組に対する提案と実施の協力支援を目的としている。

委員は、部会のテーマに即した方を選出した結果、10名中6名が新メンバーとなった。まだまだ始まったばかりの新たな取組だが、それぞれが自分事として活動しやすい体制を作ることと、取り組むテーマを明確にする必要があると感じている。これからも教育目標にコミットする南高版きのくにコミュニティスクールの活動を委員と共に取り組んでいきたい。